

卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	フランス革命と「国民」の創出—ジャコバン派の文化政策とヘゲモニーをめぐって
氏名	中澤たまき
メジャー	宗教学
マイナー	文化人類学
<p>(要旨)</p> <p>18 世紀末に起きたフランス革命は、政治体制の転換のみならず、文化や人々の意識に大きな変化を引き起こした。本稿はアントニオ・グラムシのヘゲモニー論を通じて、このダイナミズムについて分析を試みるものである。</p> <p>本稿ではまず、革命政府とジャコバン派独裁政権が旧体制的な秩序—主に王権とキリスト教の覇権—の解体を急務としつつ様々な政策を打ち出したことを、二次文献と史料をもとに概観した。フランス革命以降、フランスの非キリスト教化は 100 年単位で進行していったが、特にジャコバン派が政権を握った 2 年間は苛烈を極め、研究者の間でも評価が分かれている。その際に彼らは、理性や徳、そして統合された国民といった表象を用いて民衆を教育することで、新しい秩序を打ち立てようとしていた。そして、支配(ヘゲモニー)の必須条件として教育と大衆の同意を挙げたグラムシの理論を当て嵌めることで、革命初期の 5 年間に実施された変更や政策の意図や成果、失敗の原因の考察を行った。</p> <p>本稿における結論は、短期的には失敗に終わった一連の政策が第五共和制まで続くフランスの国家統合に影響を与えたということである。ジャコバン派の文化政策は、ライシテや「共和国」といった現代フランスの原理に深く根差しており、彼らの政策はヘゲモニー構築の原型を持ったものとして位置づけられる。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>この論文は、1789 年に始まったとされる「革命」が近代国家フランスの誕生をもたらした歴史的経緯を、政治経済的な視点ではなく、政治文化的な視点から考察したものである。そこでは、近代国家の特徴である「国民」の創出がどのように試みられたかを、特にジャコバン派の政策に焦点を当てて明らかにしている。本論文の特徴は、何と云っても、それらの政策を検証するにあたり、イタリアの思想家アントニオ・グラムシのヘゲモニー理論を参照した点にある。こうした試みは、まだ研究の蓄積が進んでいる段階だが、著者は可能な限りでの文献を渉猟してその成果を踏まえつつ、興味深い独自の論点を展開している。以上の理由から、本稿を優秀卒業論文として推薦する。</p>	